



長田秋濤

長田秋濤研究

伊 狩 章

一

明治四年十月五日静岡西草深町に生れた。父は旧幕臣の長田銚太郎、フランス語に堪能で沼津の兵学校にフランス語を教授していたが明治政府に召出されて外交官となり、仏、露の弁理公使を勤め晩年は宮内省の権大書記官となった。其親戚に成島柳北があるなど名門の家柄である。(市島春城「豪快児長田秋濤」―「余生児戯」昭和十四年刊) 秋濤(本名忠一)はその長男で、早く父に随いて上京幼少期を東京に過した。番町小学校に入学、傍ら平山省齋に就いて漢学を修めた。時折帰国する父より西欧事情を聞いて洋行熱をもやし、又、外国語特にフランス語は父の仕込みで相当の素養を基礎づけられていた。銚太郎駐露公使時代、クロパトキン將軍と親交、為に後年秋濤にスパイの冤罪がかかった。

学習院を経て二十年一月第二高等中学予科に進んだ。同窓に高山樗牛、井上準之助が居たともいう。間もなくこの年四月父の死に遭い、遺命により学校を退いて、七月留学の途に上った。

新歌舞伎劇の第一作は「菊水」(二幕、二七年一〇月四日より断続同十一月九日まで十回に汎って報知新聞に連載)である。これは一幕目、上、桜井殿遺訓の場、下、千早城西溜りの間、二幕目奥殿仏間とある如く楠公の悲劇を素材とし、それにやゝ近代的解釈を加えたものであるが結局在来演劇の型にはまった失敗作であった。

秋濤の演劇改革論は先蹤末松一派の改良意見とはゞ同様のものであった。その「日本演劇の弊風」(明二九年)によれば「今の梨園を窺ふに僅に」団十郎、新蔵など「一、二人を除くの外済度する能はず」、之を改革するには「脚本改良の手段として」仏国の如く「脚本撰採員の如き」制度を歌舞伎座に設け、「屈指の文学者及二三の多少考へのある俳優を以て成立さしめ」「俳優改良の手段として、先づ門閥、世襲、幫間、男娼の弊害を一掃し、然る後練習所を設くべし」、脚本の許否を定めるには「文部省の検定を教科書同様受けさしむるに於ては世道を裨益する事僅少にあらざる可し」という様なものであった。かなり進歩的な主張で、西欧演劇観からは当然の論であったが、当代劇界の大勢では実情を無視した理想主義の傾きがあったと考えられる。歌舞伎の伝統を愛惜する保守派から

二言めには毛色變りの通を振り舞はず所、御城下から出戻りの御転婆が、嫂の台所へ嘴を容るゝ格と見て差支なかるべし(早稲田文学二九年七月)

と痛評される如きものであった。あえて秋濤と言わずこの期の演劇改良論者が共通して受けねばならぬ反駁ではあったが、特に秋濤の過激な提唱には風当りが強く、彼の銜気趣味の故もあって梨園保守派の排撃を受けたのである。秋濤は歌舞伎の改革は諦めた如く、やがて川上一派の新派劇と提携するに至った。

この頃より文壇に名を広め、特に硯友社同人と親交、準硯友社員という存在となった。

当時の秋濤の風貌は鷗外によれば次の如きものであった。二六年冬の記述である。

湖月に宴会があつて行つて見ると、紅葉君はじめ、硯友社の人達が、客の中で最多数を占めてゐた。……僕はふ

と床の間の方を見ると、一座は大抵縞物を著てゐるのに、黒二重くろにじゅうの紋付と云う異様な出立をした長田秋濤君が床柱に倚り掛かつて、下太りの血色の好い顔をして……。〔百物語〕

この前後「早稲田文学」(二七年五月)に「日本人と仏文学との関係」ミツシエル・ルデン稿長田忠一口訳の一文あり、他に「仏都巴里」(二八年五月太陽)の西欧案内記、「花吹雪」(同、文芸倶楽部、端歌)なども発表。二九年五月より新雑誌「白百合」に久米桂一郎と共に顧問格となり、「椿姫」の脚本の一部を連載した。(未見ながら三号位で廃刊の模様)「椿姫」後年の訳業とは別のものと思われる。又、この年八月には「めざまし草」に「仏蘭西音楽」の一文をも寄せた。

この前後一時兒玉総督(一説樺山)の下に随き秘書格で台湾に赴いたこともあるという。(水蔭「明治文壇史」)三十年、侯爵伊藤博文に随行して英皇ヴィクトリア女王の即位六十年祭に臨んだ。カナダ、ニューヨークを経、ロンドンの公儀終了後、パリに再遊した。曾遊の地に足をとどめた秋濤の心裡が察せられる。加うるにたまたま旧友朝比奈知泉の外遊するに遇い「互に契濶を叙し」「昕夕往来。率ね虚日なく、時に或は馬車をアカシアの大衢に駈つて共にボア公園の新緑を掬し、時に或は手を携へて舌をルドアイヤンの珍羞に鼓し、相顧みて文物の殷盛士女の豪奢に駭く」(四四年七月「世界の魔公園」知泉の序文)という情態であった。

二

婦朝後三十一年より秋濤は本格的劇作、翻訳活動に入った。「恋の像」(三一年一月「大日本」)を初作とする。一幕物の小篇、彫刻師が美人像を彫る、骨董商が像の衣をはぎ裸像にすれば購うと言う、妾の要請により彫刻師鑿を当てんとするが果し得ず、独り苦悩していると像動き、彫刻師を抱いて接吻するといふもの。露伴「風流仏」の脚色

作とも称すべき凡作である。「菊水」「恋の像」、或いは後の作品（殆ど戯曲又は脚本の体を為す）を総じて、秋濤は独創の才に乏しかった。純粹の創作は殆ど見られず多くは泰西文学乃至先蹤作の翻譯案に過ぎぬ。作家として一家を為し得なかつた所以は全てここにあつたと考えられる。ただしその翻譯業績の価値は之と別問題である。西欧文学、なかんづく仏文学の紹介に於ては秋濤を高く評價すべきであらう。訳業の手はじめは「三恐悦」（三一年七月一八日—同八月二十日報知新聞）であつた。序して曰く

現今政界の狀態未曾有の滑稽を極むるの時、仏国隨一の政治滑稽劇「三恐悦」を掲ぐ…此脚本は仏国翰林院文学士バイロン氏の傑作に係り原名「ル・モンド・ウ・ロン・サンニユイ」（退窟社会）と称し、十數年以來巴里の梨園社会に非常の喝采を博したるもの、劇中の人物は総て今代に現存せるものを描出す…。

バイロンとは如何なる作家か審かでない。（Lord Byronならざることはいうまでもなく。）秋濤はこれを全て日本風に改め、初幕、芹沢侯爵夫人居宅玄關の場、二幕、芹沢家奥座敷の場などの如くにしてゐる。内容は上流社会を諷刺した一種の諷刺劇、モリエールの脈をひくものと察せられるが、秋濤の訳筆さえず（会話の文辞拙なく、旧劇調にとらわれている）でき榮えは香ばしくなく。

同年八月「三恐悦」は川上音二郎を中心とする新派合同の一座によって歌舞伎座に上演された。他に「又意外」をのせたが不評、音二郎はこの失敗以後渡欧するに至る。

秋濤は次いで「王冠」（三一年九月東京日々新聞）を発表、好評を得て単行書にまとめられ（三二年十月春陽堂）秋濤の声名をあげて代表作となつた。原作は François-Edouard-Joachim Coppée（1842—1908）の劇詩「王冠のたぬじ」（Pour la couronne 1895）である。緒言

こは巴爾幹が土耳其の侵略を蒙れる当時に於ける内国の一大変を叙せるものなり。…巴爾幹に一名士あり、其の名を密西児武蘭美爾といふ智勇兼備の良將たり、数土耳其の来寇を拵ぎ…。

要約するとバルカンの王位継承をめぐって將軍ミツシエルと僧正エチエンヌが争い、宿望の王冠は僧正のものとなつてミツシエル快からず、ミツシエルは妃バチリドを寵愛して息コンスタンを遠ざけ、トルコの謀略にかかつて王位篡奪の謀叛を企てる。コンスタンは父を苦諫して容れられず遂に父を刺し、捕えられて辱しめられる、彼を慕う少女ミリアツド、コンスタンの凌辱される苦しみを救うため彼を刺し自らも死す、という悲劇。原作を抄訳し五幕にまとめている。原文と対照したわけではないが筆致も確かで、一読に価する好訳と言えよう。但し「王冠」は秋濤の口述を徳田秋声が筆記したものだといふ。(秋声「思ひ出るまゝ」)。後、三八年二月川上一座によって明治座に上演された。ミツシエル(大密西児)高田実、コンスタン(小密西児)音二郎、バチリド(律子)河合武雄、ミリアツド(杏花)貞奴の顔ぶれで好評を博し、「新小説」(三八年三月)は山岸荷葉の批評と共に写真入で大きく紹介した。三一年十一月より翌年春にかけて「新小説」に「銀溪夜話」を連載した。フランスを中心とした西欧の文学、芸術社会などを紹介した雑文で第一、フランスの文芸一般、第二、ナポレオンの伝記、第三、ロンドンでの想い出、第四、パリーの社会一般などの如く、一貫性なく恣意的の憾はあるが、その国際的視野は広く、特に近代演劇については一家言を有し、フランス現代劇の紹介によって我が劇界に示唆を投げかけた意義は認められる。総じて秋濤は雑学であつて徹底した専門的知識は乏しかったが、その体験的雑学が硯友一派をうるおすには却つて有効だったとも言える。「紅葉の外国文学の知識は殆ど秋濤に負うところ」(秋声)であつたと伝えられている。

「浮れ蝶」(三二年二月文芸倶楽部)は六十枚位の短篇、原作者グレウキル女史とあるが該当する作家を知らない

ロシア小説らしい内容であるが、文辞より察するに仏訳からの重訳と考えられる。

「露都ピータスブルグを距ること數キロメートルの処に紅村の兵營といふのがある。丁度騎兵聯隊の祭の日で、庭の中央で祝宴を張って居る士官達の晚餐は今や畢らんとする処である。」席上、一人の青年士官が従妹とのロマンスを物語るというもの。

秋濤、小説の初訳であるが明快流暢な訳、ツルゲーネフの短篇にも比すべき清純な内容と相まって佳篇と称すべきである。次いで「恋之那破烈翁」（三二年七月春陽堂）を上梓、これは前出「銀溪夜話」にその一部を掲げたナポレオンの恋愛的伝記である。「帝国文学」は評して

ナポレオンの如き空前絶後の大偉人に対しては須らく慎重な研究——少くとも其心を以てせざるべからざる筈であるのに、秋濤子が用意の不完全なるには吾れ人甚だ感服し得ない。

——と言い、全般に印象不明晰、文学的叙述に過ぎて歴史的事実も果してどこまで信憑性あるや疑わしい「要するに題目の嶄新なのが取柄で其他は余り感服せられない」（同誌三二年八月）と難じた。この書は通俗的説物といふべきもので、ほぼこの評の通りである。

「狸々怪」（三二年一〇月文芸倶楽部）はポー Edgar Allan Poe の「モルグ街の殺人」の全訳である。「モルグ街の殺人」の訳には先に饗庭篁村の「ルーモルグの人殺し」（二十年十二月読売新聞）があり、後に鷗外の「病院横町の殺人犯」（大正二年六月新小説）がある。秋濤のこの訳業は鷗外訳に比べて敢えて遜色なく、この種の先駆的意義を持つ。（ただし、原文と照合したものではないので断定は下されぬが、秋濤は仏訳からの重訳ではないかと思われる箇所もある。）

尙この年の翻譯に「怨」（三二年十一月〜同十二月読売新聞）がある。紙上には俗稗人の匿名が用いてあるが秋声

の言によると、これは秋濤の原訳に秋声が修辭（果してどの程度か、秋声の「思ひ出るまゝ」の記述はかなり主観的で、事実の誤りも多し）を加え、「金色夜叉」のつなぎとして掲載されたものだという。作者はスクリィヴ Augustin Eugène Scribe 1791—1861とあるが、その原作者は不明である。スクリィヴの劇は三五〇篇を数え、その生前フランスの劇壇に非常にもてはやされたが、その内容は興味本位の「巧みに作られたお芝居」に過ぎぬ由。内容は、仏国上流社会の権謀術数を背景とし、フランス座の一女優が毒薬を仕込まれた花束によって殺害されるというもの。脚本の体裁をなし、科白は歌舞伎調で、新味に乏しい。察するに金に窮した秋濤のその場かぎりの仕事で、そんな事情から匿名となったものでもあろうか。

さてこの頃の秋濤の私生活は奔放不羈をきわめた。その交際範囲は広く上流社交界と文壇の両面にまたがり、花柳梨園での豪遊ぶりは衆人を瞠目せしめた。フランス仕込みの瀟洒たる好青年で、門閥良く、加うるに豪放な性格で、紅葉館のロマンスが喧伝されたのも此頃であった。夫人は華族にして岐阜県知事をつとめた尾崎利順の女という。（柳田氏説）

底知らずの遊蕩で其為に（官界を）浪人して、借金で首が廻らぬにも関らず、無頓着に豪遊を計画してゐた。仏蘭西語に達してゐるので盛に翻譯を試みて、間に合はぬ時は速記者に口授したりして各方面に突撃してゐた、……百円紙幣を袂からツカミ出して見せびらかすかと思ふと、囊中無一文の事も珍らしく無いのであった。（水蔭、文壇史）

或は、又、「新声」の「文壇風聞記」は

秋濤、専門学校の講師として仏蘭西文学を講ず、毎週幾回、講堂に上る時、真面目なる文学談は、一も聞く事を

得ずして、談ずる所は、多く仏蘭西の遊里、娼妓の醜事のみ、生徒皆之を喜ばず、排斥の聲漸く高し、秋濤之を聞いて笑うて曰く、「区々たる講師を辞するのは何でもない、しかし吾輩が辞したならば、五人引の車を見ることが出来まい」と、蓋し、渠の豪奢なる、金を擲つことを吝まず、専門学校に来る時、常に五人引の車を駆て、得意場々門に入れば也。（同誌三三年九月）——

と遺している。その他前掲市島春城の伝える逸話などによって見るに、秋濤の印象は一種の豪傑的風貌をしのばせるものがある。ただし、その遊蕩的な面や幾分街気のある点に於ては文界のひんしゆくを買うものがあつた、前掲「新声」の一文にもそうした毒気が見られるが、当代の革新派（「新声」一派や後述する「活文壇」同人など）によって指弾されたのも止むを得なかつたのである。

文壇では硯友社一派との交友厚く（遊戯的気分）に於て投合するものあつたが為）特に紅葉と親しく、後述する数種の訳業は紅葉との共訳、乃至紅葉の名義で發表されている。紅葉が外国小説の知識は殆ど秋濤に得たという真疑はともかく、彼が秋濤に示唆されただろうことは想像に難くない。

秋濤の文壇的地位はかなり高く「文士見立内閣」（三三年二月）では、紅葉の大蔵大臣、逍遙の文部大臣、露伴の海軍大臣と並んで、秋濤は外務大臣に擬せられているし、又、「新小説」の刷新（三三年三月）に際し、紅葉、柳浪眉山らと並んで賛助員となっている。三十三年三月大橋乙羽の渡歐送別会を広大な渋谷の秋濤邸に催し、政界、華胄界、文壇から九十余名を集める盛大な園遊会を開いたりした。一説には軍の学校にも出講し、又、演芸株式会社の顧問だったともいう。

一三年より秋濤の翻譯活動はめざましい。まず、一月「寒牡丹」（五月まで読売新聞に連載）を發表した。紅葉と共に共訳の体をとったが、紅葉のは修辭を加えた程度と察せられる。後に春陽堂より一本にまとめられ（三四年二月）又紅葉全集第五卷に収められた。四百枚に及ぶ中篇、ここに詳述する余裕もないので簡略すると、セントペテルブルグで或る雪の夜、一少女が酔った三人の士官に暴行される、少女（幌尾雷又）は復讐を誓い、犯人を探求する、様々な事件の後遂に犯人は吳城伯爵と判明、皇帝の直裁によって伯爵は雷又と強制的に結婚、直ちにシベリヤへ流刑される二年後伯はシベリヤでチブスにかかり、雷又は特赦を願出て流刑地に赴き伯を救う、伯、その真心に感じ誤解をといて改めて真に結ばれる、というもの、ロシア小説と思われるが寡聞にして原作を知らない。「新小説」（三二年五月）の消息欄に「秋濤氏が釈、露国小説雪の夜は近き中に刊行せらるべく云々」とあるのがこれであろうか。内容はやや通俗的興味を追って虚構の跡の濃い箇所もあるが、主人公の少女の描写は生彩に富み、篇末のヒューマニスティックな解釈によって低調から救われている。十九世紀中葉以降の浪漫派小説と推測され、或いはツルゲーネフの何かとも考えたが符合するもの見当らなかつた。識者の教を待つ。訳文は紅葉好みのやや旧文脈をひく口語体、やや生硬の感あるは重訳の為か。

後三六年一月、「寒牡丹」は岩崎薜花の脚色によって河合武雄一座で上演された。（東京真砂座、同年四月大阪朝日座）その際、内容がその筋の忌憚にふれ、訂正や上演禁止の場が多く、紅葉をして「元来オマハリなどに文学の事に容喙させるが間違つた話なれど聞きしにまさる警視庁の愚劣、ただただ呆然たるばかりに御座候」（岩崎薜花宛書簡柳永二郎「新派の六十年」）。

尙「寒牡丹」の挿絵は梶田半古が金沢より帰京、読売に入社した第一作で清新の趣ある処好評を博し、半古の地位を定めた出世作でもあつた。（竊木清方「日本風俗画大成明治時代」解説）

他に「大逆」(三三年五月東京日々新聞)があるが、未見なので省く、(柳田氏は翻譯なれど原作者不明とす)。

「血鬪體」(同年同月新小説)は川上眉山宅で開催した文士講談会での口演速記。ナポレオン一世の妹婿ミュラーの伝記的ロマン、原名は「ナール王国王ジョアシム・ミュラーの最期」というものの由だが他は一切不明である。又この頃に読物風の翻譯「百万年後の地球」(同年六月太陽)「世界一不思議」(不詳)などもあった。「嫉妬」(同九月新小説)は、「囚徒の遺書」という体裁をとった短篇、作風からして翻譯なること確実と思う。コペーの短篇集 *Les Contes en prose*, 1882 中の一篇ではなしかと想像される。

次の「愛の花束」(同年同月、文芸倶楽部)は秋声の言によりコペーの翻譯と考えられる。(ただし秋声の「思ひ出るまゝ」は前出の「怨」と混同しているが。又、秋濤の翻譯は概ね登場人場の名前や背景を日本化しただけの翻譯に近いものである。)そのプロットは

一人息子を溺愛している未亡人がある。息子は雇入れたお針女の少女と恋におち、少女が暇をとってからも二人の交情は絶えぬ。母は息子を独専しようとして仲をさき、息子がチブスで急死しても少女に通知もせぬ。毎週息子の墓には少女の花束が飾られるが、未亡人はその度びに之を投げ棄てる、遂に或る週より花束絶え未亡人喜ぶ。その後未亡人は再婚して心ほどこけたところに、少女の遺書がとどき、それによって女の深い愛をさとる――

母親の偏執的な溺愛、未亡人の歪められた嫉妬と、やがて再婚して心のほごされてゆく経緯を心理的に正確に描く、哀れな恋の主題には浪漫的気分を漂わせているがむしろリアルな心理小説の好短篇であろう。前出のコペーの短篇集か、或は「短篇二十」*Vingt contes nouveaux*, 1883 の方か、何れかに拠るものと思われる。秋濤の訳筆については、

秋濤の翻譯に係る「愛の花束」は原本の瀟洒たる文字なる可きを仄に想はしむるのみ。訳述の人に一段の細心な

る用意あらましかばと憾ましむ。(「帝国文学」同年十一月)——
の評言が至当なものであろう。

次いで「*レ*首」(同年九月、同十一月読売新聞)は原作者リシュパン *Jean Richepin* 1849—1926とある。反正統派の叛逆児で奇矯異常を愛し、独自の文体を立てたりシユパンは、秋濤が留学の間フランス文壇の問題作家であり、秋濤の資質に通ずるところのある文学者だった。「*レ*首」は原作「無頼漢」*Le Chemineau*, 1897ではないかと推されるが審かではない。

この頃、サルドウ *Victorien Sardou*, 1831—1908 の戯曲「祖国」*Patrie*, 1869を翻譯、後三九年秋、川上一座によって上演された。

三

さて此頃「活文壇」(三三、十一、)は次の様に秋濤の訳業を論難した。

新小説に文芸倶楽部に、日々新聞に説売新聞に、秋濤が翻譯も亦勉めたりと言ふべし。多の一字、優と同一の力あらんには、秋濤は健に大なる活動をなしつつありと言はずんばあるべからず。悲むべし…吾人は不幸にして秋濤の爲めに、多くの賛辞を呈し能はざるを——

と述べ、在来わが文壇はフランス文学に精通せるものなき為、その紹介も微々たるものであったが、秋濤出で彼に期待するところ大きかった、しかるにその翻譯は傍流文学にとどまって、ユーゴーやデュマなど一流を伝えない、思うに秋濤はフランス文学を真に理解してないのであろう、この位のものならば、在来の「重訳の寧ろ頗る可なるを言はずんばあらず。」と痛評した。筆者は恐らく木曜会の生田葵山か黒田湖山であらう。当時木曜会同人は紅葉の息

のかかった者によってのみ独専されている文壇を排撃し、新進による革新的文学を唱えており、その立場からのやや感情的な非難だったとは思われるが、「活文壇」はこの年の新年号でも秋濤が口訳筆記させている不まじめさを叩いている。しかし、右の批評は秋濤の急所をつく、正鵠を射たものであった。現在秋濤の名が上田敏や馬場孤蝶などに伝わらぬ理由は、一つには彼の文学的天分や、専門的知識の乏しさの故に帰せられるが、一つにはその訳業が余りに恣意的で玉石混淆の濫訳だったことに原因している。秋濤の代表的業績として普通あげられるのは「椿姫」一篇（やや好意的記述の時に「王冠」と「鐘楼守」が加えられる程度）があるだけだが、彼の名を低からしめている最大の理由であろう。ユーゴー、デューマは無論のこと、ゾラであれドデーであれ彼が知らぬ筈はない。努力を惜みず一流大作を集中翻訳しておいたなら今日秋濤の名は文学史により大きく記されていたに違いないのである。

この「活文壇」の評言に刺戟されたか否かは知らぬが、（恐らくはかなり反省させられたものであろう）以後秋濤はデューマ、ユーゴーの二大作の訳業を試み、代表的業績を遺すにいたっている。秋濤にとって「活文壇」の一文はまさに頂門の一針と称すべきものであった。

三四年、秋濤は片々たる訳述を為さず「椿姫」に取組んだ。万朝報に連載しはじめて間もなく発表禁止の厄にあい（斎藤昌三氏）一年間を置いて早稲田大学出版部の「文学叢書」の一巻として単行上梓（三六年五月）したものである。この時は官憲のがめもなく「此児世に生るる時、思ひ設けぬ難産にて、子は一命覚束なかるべく、親もそこばくのいたつきは免かれまじなど、人々の憂ひ合ひし程なるを、このたび無事出産、親子すこやかなるを得るは云々」と献辞した。好評を得て忽ち版を重ね秋濤の代表作となった。

「椿姫」La Dame aux camélias, 1848 と言ふべきであらう Alexandre Dumas (Dumas fils) 1824~1895 の作

デューマはこの一作によって浪漫派文壇の寵児となり、翌年脚色、一八五二年舞台にかけられるや大成をおさめ、デューマは劇作家の地位を確保するに至った。内容は説くまでもなく今から見れば通俗的悲恋小説であるが、「愛すべき人にして世の愛する所とならざりし薄命の人」に対する「無限無涯の同情」と「愛すべき人を愛せざる社会を責め之を誠しめ正さんとした」(秋濤序文)ヒューマニスティックな意図によって「今日写実派全盛時代、否殆ど十分の発達を終った後に在てすら、世は愛読して措く能はず現に十八ヶ国以上の国語に翻訳されて其美をたたへられつつある」(秋濤)というもの。悲恋の一つの型を示した意味に於て明治文壇に及ぼした影響を考えられその点秋濤の翻訳の意義も再考の余地があると言える。今後の比較文学研究家の調査を期待するものである。

秋濤はマルグリットを後藤露子、アルマンを有馬寿太郎という如く人名を日本化したのみ他は殆ど原作通りの全訳である。この翻訳がいかなるものであつたかを述べるに、当時「帝国文学」(三六年六月)に最も適切な論評が載っている。「椿姫」のみならず秋濤の全業績を評価して公正妥当な品階であるのでやや長文ながら引用する。(殆ど原文のままながら理解の為多少手を加えた)

—— 先ず劈頭に長田君の訳文と、デュウマの原文とを駢べ掲げる。

「這歴事を考へてゐる中、端なく憶ひ起した事がある。自分の知合に、昔し依然斯様いふ世すぎをした婆様が在つて、美しい娘を有て居たが、決して我児といふ情愛はなく、唯『善く稼で母親様に榮をさせてくれないぢや』と命令する時ばかり母親風を吹かせる。娘は却々親孝行で、情も捨て、榮も捨て、母親に從ひ、世間の子供が真卷の手伝でもする調子で、例の忌しい稼業を行つてゐた。」

J'ai connu une ancienne femme galante à qui il ne restait plus de son passé qu'une fille presque aussi

belle que, au dire de ses contemporains, avait été sa mère. Cette pauvre enfant à qui sa mère n'avait jamais dit: Tu es ma fille, que pour lui ordonner de nourrir sa vieillesse comme elle même avait nourri son enfance, cette pauvre créature se nommait Louise, et, obéissant à sa mère, elle se livrait sans volonté, sans passion, sans plaisir, comme elle eût fait un métier si l'on eût songé à lui en apprendre un.

右抜萃の一節は、必しも無暗に引き出したのではない。その理由いかにとならば、成る丈け、直覺的に瞬間的に將た模範的に、原作と訳文との相異の点、若しくは、如何程の度合まで、両者の渾然たる融化が行はれてゐる歎を、示す積りで挙げたからである。……原文のイタリツクスと、それから訳文の句の批圈は、評者が便宜上施したので有る。……

(一)一読した人は、忽ち氣の付く通り、原文に現れた句で、訳筆に洩れたのが、此數行の間に三箇所許り有る。例へば「情も捨て榮みも捨て……」とあるは、

「意氣地も捨て情も捨て榮も捨て……」

とあるべきではあるまいか。

(二)是と反対で、原の字句に現はれず、又含蓄されない意味の、訳文に附加へられたることは、全篇を通して甚だ多し。批圈を加へた所は斯かる場処を指したのである。

云々と続け、しかしこうした技術上の瑕瑾はこの業績の価値を損うものではない。「五百頁に垂んとする、然も芸術的研究の為に」訳された本書は高く評価してよい、と断じ、更にデューマを論じ「棒姫は泥中の蓮だ」と賞讃したあと、最後に、この訳書が原作の味を変え、マルグリットに日本的な娼婦風なものを感じさせる点を歎じて、

——即ち此根本的觀念の區別は、技工上の梢に岐れて、著しく色彩の異なる花を咲かすこととなつた、換言すれ

ば原作の椿姫は秋濤の椿姫となって仕舞ったとのことである、これは或は少しひ過ぎかも知れぬ。然しながら、秋濤君の椿姫は、アフティフィツシャルの白粉をつけ濃厚なる紅賦によって彩られ、……香水の俗臭芬として吾人の鼻を襲ふやうな趣の女に見える。……楚々たる風神を西欧の文の林に恣にした梅の花は、東海の文苑に移し植へられる時に、もとの色香を失って、富貴に晒れる牡丹に変わってしまった、……

その原因は秋濤の訳筆の為ばかりであるまい、「全く是れは国語の土の性の、花と適應せぬためでがなあらふか」（うづせみ）。やや美文調の明文、「椿姫」自体に即しすぎその浪漫的な内容と芸術的価値とをいささか高く評価し過ぎているくらいがあり、従って論題から逸脱した部分も眼につく。しかし、秋濤訳「椿姫」の論評として同時に秋濤の全業績の価値を決定したものととして適切正當な一文である。秋濤の翻訳態度には確かに低調通俗のそしりをまぬがれぬ点があった。それは彼の選択した原書が概ねドラマチックな、通俗的興味を主とする一類に偏している所にも現われている。真摯なりアリズム文学、芸術の香り高い浪漫派小説を敬遠して大衆的興味本位の作のみを採り上げ、安易な粉飾を事とした恨はおさえがたい。一つには紅葉の示唆もあったであろうが、要は秋濤自身の資質に由るところであり、その業績の限界を示すものであった。

この一文の筆者「うづせみ」とあるが、当時「帝国文学」の執筆陣より推して上田敏その人と判断したが、どうであろうか。

尙「椿姫」の翻訳は柳田氏によればこれ以前に左の如きものがある。

明六・五・郵便報知新聞に出た「成島柳北滞欧書簡」を初出とし、明十七、「巴里椿の俤」、草廬戸主人「函右日報」。同十八、「新篇黄昏日記」、天香道人閱、醒々居士著、駉々堂。同二十一、「椿の花把」加藤紫芳訳、「小説萃錦」。（他に紫芳には二十二年刊行の完訳がある由。）

次いで「有髮尼」(同年四月「文芸倶楽部」)は大西忠雄氏によればモーパッサンの「Le pardon」1882.の反案とのこと。花袋による「アフタ・ディナ版」の紹介以前の訳業として史的意義は高いものがある。(参照「日本比較文学会々報」第四号——モーパッサン輸入資料、大西忠雄。「比較文学」(矢島書房)所収拙稿「モーパッサンの輸入とその媒介者」)

他に三四年には、「六大洲の發見」(五月、文芸倶楽部、原作者ルイ・フィギュイェー)「乞食坊主」(同、同誌)「赤十字」(十一月、女学世界)などがあつた。次いで「恐婚病」(三五年五月文芸倶楽部)は、脚本の体をなす小篇、「滑稽二人兄弟」(同年十一月文芸倶楽部)も同様の脚本、何れも拙作である。「用筆頗る拙劣、読者の感興を惹くに値すべきにあらず、此れ等の作にして尙能く滑稽の名目を冠し得べくんば、只々滑稽小話に筆を染るの甚だ容易なるを憾みんのみ」(帝國文学、三五年十二月)と酷評されている。恐らく翻案であろう。他に「十九世紀に於ける仏国絵画界の大勢」(同、九月以降太陽連載)「偉人の精力」(同、同、中学世界、ナポレオンの伝記)などもある。又、「恋愛奇談西洋花暦」もこの頃のもの、未見だがポツカチオの「デカメロン」に抛り、「奥様の試験」「ゆりかご」「お心よし」「二筋道」「お互ひ様」の五篇を収載するもの由。

四

この頃より紅葉健康すぐれず「金色夜叉」の休載つづいて読売新聞を退社、秋濤は同僚の堀紫山と計って在籍する二六新報に紅葉を入社させ、更に紅葉の経済を援ける為に「鐘楼守」の翻訳を企てた。

電話にて午前長田氏来り、後兩三回紅葉館より人来りて面会を求むとの事也。因りて車を馭せて之に趣く。長田伊藤、外に横浜三井物産の滝沢某。予を待てるは、かの早稲田遊書ノオトルダム翻訳の件にて出版の合議全く成

る。(十千万堂日録、三六年三月卅日)

前述の如く秋濤はこの時「椿姫」の訳述に専念しており暇がなかったのであろうか、翻訳の助手を使っている。右に見える伊藤がそれである。(伊藤重次郎——号、十字楼。秋濤に学びて仏語に長じ、後早大教授となり交通学を講ず。)

六月には紅葉も英訳書 (Isabel Z. Hapgood 訳) を購って推敲し、病勢悪化して「身重痾の褥に在るも刪潤校訂皆之れをみづからし、雕心鏤肝の細巧殆ど一日だも欠くことなかりき」(坪内逍遙序文)ともいうが病進むに及んで秋濤にゆだねられた。ただし、秋声によれば、紅葉の刪正は最初の十枚位で、後は秋声自身が加筆訂正したものだといふ。(「思ひ出るまゝ」——「代作」)

十月卅日紅葉臨終に際して枕頭に秋濤を招き「吾命今宵に迫る、鐘楼守の刻成を見るに由なし、遺憾に勝へず、翼くは後事を挙げて卿に囑するを得んか。当時余が胸中に於ける万斛の悲痛自から禁ぜず、點頭して諾意を表するのみ。」(秋濤序)かくて紅葉歿後、後半部は秋濤刪正を加え、この年十二月刊行されたのである。

「鐘楼守」Notre-Dame de Paris, 1831. は述べるまでもなく Victor-Marie Hugo 1802~1885 の作、上下二巻七百余頁に及ぶ十九世紀浪漫派歴史小説の雄である。「嵩高にして雄偉、操守堅固にして想像豊富、天来の奇想と絢爛の詞華と、殆ど人をして神工鬼技なるや疑はしむる」(序文)作者の面目を發揮した代表作である。訳文は完全な現代語訳、カシモオド、エスメラルダ、など原名のまままで手を加えず、完訳である。冒頭の一節は、

「時は正に三百四十八年六箇月と十九日の昔、巴里の街々は、内巴里、学生区、外巴里の三重の外壁の内に鳴る有ゆる鐘の頁に其眼を覚された。とは謂へ、千四百八十二年一月六日といふ日が、歴史に何等の記録を留めたのである。巴里を挙げて、鐘と市民とを夙から騒がせた事件に就いては、別に歴史に記すべき所は無いのである。」
在来紅葉の文章に見られた彩華修飾もなく、平明簡潔な表現で、後半秋濤刪正の部分もさして難点なく好訳と言え

る、寡聞にしてこの前に「ノートルダム」の訳書あるを知らぬ。二八年頃に鈴浦漁人の「ノートルダム塔概論」があるというし、その他抄訳ぐらゐはあるかも知れないが、この先駆的訳業が形式内容ともに高く評価すべきであることは疑いを入れぬ。

「帝国文学」（三七年二月）は詳評して、

紅葉絶倫の才筆を駆つてユウゴオ千載の傑作を訳す、文壇の偉觀何者か焉に加へんや、又以て日本島帝国が為めに一のブライドを添へたる者には非ずや。嗚呼彼を以て此を翻譯す、不言の言、不語の語（畧）思はず端座礼拝の信念の腔子に湧き来るの感あらしむるは、語学の力以外、熱摯なる良心的真面目以外、天賦の才分識得以上に超越して黙々の間契合神会する所有るに因る歟。冒頭より訳文を試みに取りて之を原書に对照せよ、謹嚴周匝一句一画苟もせざりし故人の苦心の跡を認めずんばあらず、

と、やや溢美に及ぶ贅辞を呈し、後半部に至つては、例えば第七篇第八章など原文と比較するに

筆致は愈よなだらかに對話の訳しざま自然にして將た活躍するにも拘らず、そこに幾多の些かづつなる遺漏あり、省筆あり殊に他の文に到つては其甚太しきを見る、

けれどこれは白璧の微瑕と称すべき程の欠陥で、とにかくこの訳業は、わが翻譯界にとつて、聖書、プラトン全集などに次いで万丈の気焰を吐いたものであった、と最大級に称揚した。筆者は上田敏でもあろうか、紅葉誄の色あいが濃い傾きはあるが、一応適切な評言であつた。翌三七年二月「鐘楼守」は脚色され大阪天満座に上演されたが、（喜多村、河合、高田ら）不評だったという。

他にこの年のものでは「花ことば」（同年四月、文芸俱樂部）、「玉玲瓏」（同、十月同誌）がある。後者は雅文調の創作、幕末の京都を舞台に勤王の志士と芸妓との交渉を描いたもの、殆ど読むに堪えぬ駄作である。

三七年にはモーパッサンの翻訳二篇がある。これに就いては既に発表したものがあるので簡略するが（前掲拙稿）「生弁天」（同年二月文芸倶楽部）「豚林」（同年十一月同誌）がそれである。前者はモーパッサン一八九〇年の作 *L'Inutile Beauté* の訳、普通「あだ花」と訳題されている中篇の佳作。人名を増子伯爵、文子夫人などとしただけの完訳、訳文流暢でよく原作の味を伝えている。当時モーパッサンの翻訳は全て英語よりの重訳で（上田敏の二篇が原書に拠るかをやや疑わせるのみ）秋濤に於て初めて直訳がなされたのではないかと察せられるが、その点モーパッサン作中でもかなり心理的に複雑なこの作をとり上げた意義などに於て、この訳業は買われてもよい。しかし、何と言ってもモーパッサン紹介の第一の功労者は花袋と孤蝶であり、秋濤はやはり追従者たるにとどまる。

「豚林」は原作 *Ce Cochon de Morin*, 1882, 艶笑物の短篇。主人公モランを森林蔵としたもの。

この頃不幸にも露探の疑いを受けるという奇禍に遭った。前掲市島春城の文に所収されている「逸事録」（記念碑建立を機として門弟知友による「秋濤会」にて上梓されたもの）に拠れば、要するに彼の奔放不羈な社交と放縦な生活態度が招いた災いであった。日露協会の幹事として露国公使館に出入し、仏蘭西の銀行から毎月顧問料を受けるなどの国際的社交が偏狭な一部人士の疑惑的となり、加えて、秋濤の後盾である伊藤博文の失脚を策する桂公爵一派の政治的陰謀、同時に秋濤が顧問となっている三井と三菱の資本陣営の争いなどがからまったものだという。秋濤にとっては全く無実の罪であったが日露戦中の軍国調にあおられて有罪となった。戦後その冤罪なることが証されたがしかしこの事件は秋濤にとって大きな痛手となり、政界、文壇の第一線から葬られた如き存在となった。

自然その筆力も衰え、僅かに「脚本、大那破烈翁」（三九年二月文芸倶楽部）「生死」（同、三月太陽）「喜劇、婦人財囊」（四一年六月時事新報）「脚本、吸血児」（四二年三月文芸倶楽部）「残光」（四三年一月翻案、高田一

座上演、朝日座)などの創作、翻訳を遺すにとどまっている。その後は「世界の魔公園」(四四年七月)「赤毛布物」(不詳、文録堂)などの雑著に退き文壇を遠ざかっていった。紅葉の死去と共に硯友社の勢力も急激に失墜、秋濤も発表の場をせばめられたこと、敏、荷風をはじめフランス文学者、広瀬哲士、後藤末雄などが現われ正統的紹介、研究がなされ始め、秋濤の存在意義が薄れたこと、などがその理由であろうが要するに彼の恣意的、遊戯的態度の然らしむるところだったのである。

明治末、三度洋行、南洋方面のゴム樹栽培事業に着目、外務省の勸奨を得てシンガポールにゴム園の経営を企てたが成功せずして帰国、大正四年十二月播州垂水に卒す。享年四五歳。歿後「凶南録」(南方経営を説く)が上梓された。

五

要するに秋濤の意義は、荷風も述べている如くフランス文学の初期紹介者だった点に帰する(荷風、上田敏先生)その媒介の態度に一貫性乏しく、フランス文学の真髓を伝えなかつた恨みがあり、柳村の「仏蘭西文学の研究」(三四年十二月「文芸論集」)の如き正統的態勢をとらず、雑学的、趣味的のそしりは免れないが、ともかく「王冠」「椿姫」「鐘樓守」を代表とする彼の訳業が三十年代文壇に或る程度の示唆を与えたことは疑いない。その翻訳の先駆的意義と共に高く評価さるべきであろう。敏の研究が盛んな割には秋濤の業績が認められていない観がある。

特に硯友社一門中唯一の外国文学者として、又西欧通として社中をうるおした功績は高い。紅葉が彼に暗示を与えられたであろうことは、如上の事実からも知られるが、その他、紅葉の泰西文学の読書や、翻譯の範囲などにも、その気配濃いものがある。その他後期硯友社の諸家が新文学をきり拓いてゆく手がかりには彼に負うところもあつたと

察せられる。更に、彼の国際的視野の広さは政治外交面に一家言を立て、又、西欧新思想の輸入にも貢献するところであった。彼の門下からアナキスト安谷寛一が出たことも偶然ではない。(柳田氏)

又演劇方面への寄与も認めてよい。初期の改良論は、時代的にまだ機熟さず為に過激な印象を与え、突らずして了った感があるが、新派劇、翻譯劇に与えた感化は大きく、この面に及ぼした功績高く評すべきである。硯友社中、山岸荷葉と並んで、新劇界の功勞者と称すべく、高安月郊、中内蝶二らに先行する意義が認められる。

反面、秋濤には独創の才少なく、厳しい作家精神も欠けていた。その点放恣な生活態度と共に一部の反感を買うものがあつたのは止むを得なかつた。

以上調査不十分で秋濤の研究としては徹底を欠くが、今後の研究者の基本的文献として敢て発表した。特に比較文学研究家の厳密な考証によって、より詳細な考察を期待して止まない。

終りに本稿は柳田泉氏の著書「明治初期の翻譯文学」「隨筆明治文学」並びに氏の示教に拠るところ多い、厚く御礼申し述べる。他に田中弥十郎氏に「長田秋濤の閩南録」(昭十七、十二「書物展望」)「長田秋濤の著作」(昭十八、三、同誌)などの文章あることを知っているが見るを得なかつた。

尙本稿は「後期硯友社文学の研究」の一部をなすものである。